

日本インテリア学会 関西支部

第5回学生研究発表会

プログラム・発表梗概集

2026年3月7日（土）開始：13時 [オンライン開催]

日本学会インテリア関西支部 学生研究発表会 実行委員会

委員長：片山勢津子

委員：中村孝之・黒田智子・近藤雅之・西山紀子・矢部仁見・井上徹

問い合わせ先：stpjasis@gmail.com

【プログラム詳細】

開会式（13：00）：日本インテリア学会関西支部長挨拶

中村孝之氏

A：論文発表部門

【セッションA 論文 13:10～13:30】

座長：黒田智子（武庫川女子大学）

01. 吉良川の町並みを守り続けるために -観光を求めず生活を守る-

中野 妃彩（京都橘大学 工学部・建築デザイン学科 4年） 推薦者：鈴木あるの・松本正富

02. 世帯人数の少ない集合住宅における交流の仕掛けに関する研究

小林 未歩・仲尾 紘香（京都女子大学 家政学部・生活造形学科 4年） 推薦者：是永美樹

B：作品発表部門

【セッションB1 13:40～14:20】

座長：矢部仁見（帝塚山大学）

03. フィルム・キョウト

劉 昊林（京都橘大学 工学部・建築デザイン学科 4年） 推薦者：半海宏一

04. 縫いなおす風景 -野洲川と暮らしのあいだに-

飯田 安澄（京都美術工芸大学 建築学部・建築学科 4年） 推薦者：白鳥洋子

05. 河内平野を貫く長瀬川の再興計画

溝淵 優香（京都女子大学 家政学部・生活造形学科 4年） 推薦者：是永美樹

【セッションB2 14:35～15:35】

座長：近藤雅之（積水ハウス 住生活研究所）

06. 関係人口の創出に向けた地域拠点の提案

有馬 叶（京都女子大学 家政学部・生活造形学科 4年） 推薦者：是永美樹

07. 海と人の next step -福井県大飯郡高浜町における地域活性化のための宿泊施設-

井本 弥玲（帝塚山大学 現代生活学部・居住空間デザイン学科 4年） 推薦者：矢部仁見

08. Flow – 車いす利用者と地域が日常を共有する集合住宅の提案 –

堺目 愛和（帝塚山大学 現代生活学部・居住空間デザイン学科 4年） 推薦者：矢部仁見

09. キモチ空間/COMBINE -間取りが変化する空間の提案-

岩村 えみり（帝塚山大学 現代生活学部・居住空間デザイン学科 4年） 推薦者：矢部仁見

閉会式（15：35）：日本インテリア学会関西支部学生研究発表会 委員長

片山勢津子氏

日本インテリア学会 関西支部
第 5 回学生研究発表会 梗概集

吉良川の町並みを守り続けるために

観光を求めず生活を守る

中野妃彩

The sustainable preservation of Kiragawa's townscape

Protecting livelihoods without seeking tourism

Nakano Hihiro

1. 研究の背景・目的

近年、歴史的な町並みが残る地域では少子高齢化や若者の地元離れなどにより、後継者不足が課題となっている。また歴史的な町並みが身近にあることで地域住民はどのような意識を持っているのか理解が必要である。

高知県室戸市吉良川地区は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されているが、県の最東部に位置し高知市内からは車で100分程度の時間がかかり、JRからも遠く交通の便もよくない。そのような場所にある伝統的建造物群保存地区を地域資源として県内外のより多くの人に知ってもらい、地域住民は保存・継承するにあたって何かできることはないかと考えたのが研究の動機である。また同じ高知県東部に住むものとしてこの場所を誇りに思い、多くの人に知ってもらいたいと考えている。本研究では、高知県室戸市にある吉良川地区の重要伝統的建造物群保存地区を対象とし、それがあることによって住民にどのような価値や意識があるのかを調査する。また地域の観光資源としての活用の可能性を調べる。保存活動について若い人の担い手や後継者はいるのかを調べる。

2. 吉良川地区について

吉良川の町並みは、備長炭の繁栄と共に先人の手によって建築された。旧街道沿いに沿う浜地区と山側の丘地区で構成され、それぞれに吉良川地区ならではの建築様式が見られる。坂の上の地域(丘地区)と坂の下の地域(浜地区)では建物の高さが統一されている。明治時代から昭和初期に建築された建物を中心に、東西1kmにわたって軒を連ねる風情ある佇まいが今も残されている。

2-1. 吉良川地区の町並みの特徴

(1) 水切り瓦

高知県は暴風地域であり、吉良川地区は南北に長いため、その傾向が顕著である。こうした自然環境ゆえに、「水切り瓦」という地域独特の工法が発達してきたといわれている。もともと、妻壁面の異種仕上げの水切りとして始まったものと考えられているが、壁面に取り付けた小さな庇のような形状は直接雨が当たることを避け、壁面を保護する役目を果たす。

(2) いしぐろ

吉良川地区には「いしぐろ」と呼ばれる石垣がたくさんある。台風が頻繁に襲来してきた時の防風対策として台風の強い風から家を守るためのものである。



図1 水切り瓦といしぐろのある家(京都橋大学鈴木研究室提供)

その他にも吉良川地区では「土佐漆喰で塗られた白い外壁」や「虫籠窓」、「なまこ壁」、「左瓦」、「レンガを用いた建物」など吉良川地区独自の建築方式を見ることができる。

2-2. 吉良川地区の家の特徴

吉良川地区の家のほとんどが昔商売をしており、多くの人が入り出りできるように玄関がとても広い造りになっている。それぞれの家の天井部分には必ずしごがついており、普段使わないものが収納されている。この収納部分は、「つし2階」と呼ばれ中2階になっている。吉良川地区の家はどの家も大体同じ内装になっている。



図2 玄関部分、図3 家の内装(2025年8月23日撮影)

3. 先行研究・事前調査

先行研究で秋田県横手市の増田重要伝統的建造物群保存地区、広島県呉市御手洗重要伝統的建造物群保存地区、2010年12月時点の重伝建地区88地区・未選定地区80地区を比較した研究、福島県下郷地区大内宿伝統的建造物群保存地区・福島県南会津郡南会津町前沢家曲集落、群馬県六合赤岩伝統的建造物群保存地区について調べた。

本研究の事前調査の一例として令和7年7月4日に立命館朱雀キャンパスで開催された文化庁主催の「伝統的建造物群保存地区制度創設50周年記念シンポジウム～まちなみを紡ぐ人々のあゆみ」に参加した。取り組み発表では角館(秋田県)、妻籠(長野県)、白川郷(岐阜県)、萩(山口県)における取り組みの発表について聞いた。また、過去に吉良川地区のイベントに参加した感想として休日昼間だったのにも関わらず、観光客の少なさやイベントスタッフの中心となっている方は年配の方が多かったことが把握できた。

4. 調査方法

本研究では、主にフィールドワークとインタビュー調査を行った。フィールドワークでは特定非営利活動法人吉良川町並み保存会の観光ガイドツアーに参加し、お話を伺った。インタビュー調査では地域住民の方に飲食の場を交えた憩いの場において約10名の方に直接インタビューを行い、事前に準備した質問項目に答えて頂いた。また、当初室戸市役所への訪問調査を予定していたが、担当部署の業務上の都合により訪問での調査が難しくなったためメールでやり取りし、質問項目に答えて頂いた。

5. 調査結果

5-1. 町並み保存会の聞き取り調査から分かったこと

本調査から町並み保存会からは高齢化・担い手不足・行政との滞りが大きな課題となっていることが分かった。吉良川地区に定住して住みたいという人がいて貸す家もある。しかし、室戸市が家の修理費用をかけてくれなく、移住促進をしたいというものの行動に移してくれないため家を貸す段階に至っていない。これは長年の課題であり、保存会は何もすることができない。また、吉良川地区では観光地化を全く目指していない、現状維持をしていきたいといった点が他の重伝建地区と比較して大きく異なる点だと分かった。

5-2. 地域住民の聞き取り調査から分かったこと

本調査から地域住民からは「次世代への存続の不安」と「町並みへの愛着」の双方を抱えながら生活をしていることが分かった。人口減少や住民の高齢化による後継ぎ問題や若者に対しての理解、暮らしやすさについてと

ても心配している。また、吉良川地区では家の継承者が決まっていなく、将来自分の家がどうなるか分からない先の見えない不安が生じている。一方で、吉良川地区では集まって頂いた地域住民全員がとても仲良く口を揃えて「この町に生まれてよかった」、「今の町並みを守りたい」と言っていたのが印象的であった。昔と変わらない町並みで今も暮らせていることを誇りに思っていた。その反面、補助金の少なさ、町並み保存の在り方、福祉制度や若い人のための雇用の場を設けてほしいといった意見も多くみられた。

5-3. 市役所の聞き取り調査から分かったこと

本調査から吉良川地区の町並み保存における行政の取り組みが詳しく分かった。吉良川地区で行われているイベントには住民と市役所が連携している取り組みがあると分かった。イベントの中には住民から好評を得ているものがあり、住民と市役所の協働を実感できる。また、将来を見据えて高等専門学校や大学を交えてヘリテージマネージャーの大工、設計士、建築士の育成を行っており、地域産業を継承しようとする姿勢が確認できる。さらに、農林水産業や地域産業と観光の結び付きによる商業活性化を図ろうとしており、景観保全と地域経済の両立が求められている。

6. 結論

本研究で行ったフィールドワークとインタビュー調査より他地域と比べて住民同士の繋がりがかなり強く、町並みを誇りに思い、愛していることが分かった。保存会や住民は日常生活の延長として町並みを守る意識が高く、観光地化を望んでいない。また、市役所も観光業を発展させて地域経済を活性化させたいという思いはあるが観光地化を目指して観光客がたくさん来ることを望むという意向は示されなかった。一方で、保存会・住民と市役所の間には意識のズレがあるということが分かった。

しかし、住民が望む「今の町並みを守りたい」ということはいくつかの条件が揃えば可能である。家の譲り手が決まり空き家化が防げること、若い世代に保存意識が浸透し担い手が育つことである。さらに市役所が将来を見据えた取り組みを行っており、ヘリテージマネージャーを育成することである。また、保存会・住民と市役所間や世代間の意識のズレを調整することで今の町並みの持続的な存続に繋がるといえるだろう。

(京都橘大学・4回生)

世帯人数の少ない集合住宅における交流の仕掛けに関する研究

*小林未歩**仲尾紘香

Research on communication mechanisms in apartment complexes with small households

Kobayashi Miho Nakao Hiroka

1. 研究背景と目的

2020年の国勢調査では、単独または夫婦のみの世帯などの2人以下の世帯が6割以上を占め、2050年には全体の7割以上に達すると見込まれている。このように世帯構成が変化しつつある現代は、住宅内でのコミュニケーションが希薄になり、その結果生じる孤独・孤立は大きな社会課題となっている。孤独・孤立は心身に不調をきたし、社会保障にも深刻な影響をもたらすとされており、社会全体で孤独・孤立への対策は必要不可欠である。このような状況に対し近年、住民同士や地域の人との交流を促す場が計画された集合住宅が増加している。そこで本研究では、住民のつながりを促す場を「つながるコモン」と定義し、世帯人数の少ない集合住宅を対象に、住民同士や地域の人々との交流を促すような場の仕掛けや設計上の工夫を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

建築専門誌『新建築』（2009年～2025年8月号）、『住宅特集』（2010年1月～2025年8月号）で主な居住者の対象が2人以下を想定し、かつ、地域や住民同士が関わりあうような場が計画されている集合住宅69事例を対象とする。それらの図面および設計者の解説、写真のキャプションなどを読み込み、居住スペースと交流スペースの関係性などについて把握する。



図1 LT城西 (C部分)



図2 食堂付きアパート (C外部分)

3. 「つながるコモン」の特徴

「つながるコモン」のプログラムは「①仕事・アトリエ系」、「②運動系」、「③宿泊施設」、「④販売・展示系」、「⑤教室、図書室」、「⑥コミュニティ系」、「⑦外部スペース」の7つに分類できた。次に利用できる人（住民のみC、住民以外P、住民と住民以外C+P）と集合住宅の内外の区別を確認した。その結果、C、C+Pでは、リビング系を「つながるコモン」とする事例が、Pでは店舗を「つながるコ

モン」とする事例が、それぞれ多くみられた。外部空間を「つながるコモン」とする事例は、全体の7割で確認され、C外ではテラス系が、C外+P外、P外では中庭・庭が最も多かった。

4. 「つながるコモン」による交流の仕掛け

「つながるコモン」の箇所数と内外、利用主体ならびに住戸へのエントランスとの位置関係を整理した。まず、対象とした集合住宅は表1に示すように、「つながるコモン」の箇所数から4つに大別でき、さらに利用できる人と住戸へのエントランスの関係から細分した。

これらを利用者に着目して考察する。IbとII dは住民のみが利用できるCのみが計画されており、Ib1は内部のみ、Ib2は外部のみ、II dは内外があり、いずれもCを通して住戸にアクセスするため、自然と住民同士の交流が発生しやすいと考えられる。このなかには、Cを吹き抜けとし、階をまたいで気配を感じられるような断面的な工夫が1/3程度の事例でみられた。

次に、Ia、II a、III aは、住民以外にも開かれたPのみが計画されており、IaはオーナーがPを運営している。II aとIII aは、住民以外に開く内外があり、住民は必ずP外を経由して住戸へアクセスする。中でも、II a1は店舗併用の住居が並ぶ長屋である。Pが日常的な動線から離れていることで、住民は住民以外との関わり方を自ら選択でき、適度な関係性を維持しやすくなると考えられる。

この他は、住民および住民以外にも開かれたPとCの双方が計画されており、これらは①PとC、②P外とC外、③Pと外部、④C+P、⑤PとP外とC、⑥PとCとP外とC外のすべてが計画されたもの、に細分できた。①はII c2とIII cで、いずれもPとCが離れて計画されており、Cを介して住戸へアクセスするものの、Pでは他者とつながることができる。②のVでは外部のみが計画されており、住民は必ずC外を通り住戸へアクセスするが、そこがイベント時には住民以外にも開かれる場となり、日常の生活空間ににぎやかな風景が重なる。外部のみで計画することで住居のセキュリティ面でも配慮しやすい。③はII bとII c1で、いずれもPとは離れた位置にC外+P外又はC外が計画されており、住民はPを通らず、C外+P外かC

外のみを通して住戸へアクセスする。④は、Ⅱe、Ⅲd、Ⅲeで、住民はC+P又はC外+P外を通過、あるいはその気配を感じながらCを介して住戸へアクセスする。C+Pは開放時には住民以外にも利用されるが、平常時には生活の場の一部として住民同士がつながる。⑤はⅢbのみで、住民は住戸へアクセスする際、P外を通り隣のPの気配を感じながら、C又はC外を通過して住戸へアクセスする。

⑥はⅣa、Ⅳb、Ⅳcで、①と同様にPとCの双方が計画され、ⅣaはPに隣接したP外を通過して住戸にアクセスするが、住民のみのCとC外はPとは別の場所に設けられている。ⅣbはⅢcと同様、住民同士のつながりが守られたうえで、地域の人とつながるPやC+Pを併せ持つ。住民は気分や生活のタイミングに応じて、誰とどうつながるかを選択できる段階的な「つながるコモン」が計画されているといえる。Ⅳcはオーナーが運営するPがあり、それとは別のPが接道階に配置され、上層階に外部も含めたコモンスペースが確保されている。

このように「つながるコモン」は、住民が他者とどの程度、どんなタイミングで、どう関わるかを選択できる空間として計画されており、世帯人数の少ない集合住宅において、孤独・孤立を解消する場として積極的に取り入れるべきではないかと考える。



図3 LT城西 (成瀬・猪熊建築設計事務所)



図4 食堂付きアパート (仲俊治・宇野悠里/仲建築設計スタジオ)

5. まとめ

本研究では、世帯人数の少ない集合住宅における交流の仕掛けである「つながるコモン」に着目し、プログラムの種類や利用者、内外の関係から、住民が他者とつながることのできる多様な交流の仕掛けを明らかにした。

【参考文献】

- 『新建築』. 新建築社. 2009年1月～2025年8月号
- 『住宅特集』. 新建築社. 2010年1月～2025年8月号 (*京都女子大学 家政学部 生活造形学科・4年)

表1. つながるコモンによる交流の仕掛け

		Pオ	P居	P	P外	C外+P外	C+P	C	C外	E	延床(m ²)
I a	共 PLAT295	○E								別E	380
	共 矢束町のアトリエ	○E								別E	952
	共 IsechoNEST	○e									184
	寄 LT城西							◎E			322
	寄 15Rooms							○E			214
	寄 龍宮城アパートメント							○E			322
I b1	共 向丘・旬創館									◇E	534
	共 関沢の共同住宅									□E	454
I b2	長 SASU・KE									□E	446
	長 代田の屏風長屋		○		□E						236
II a1	長 hocco	○			□E						812
	長 つながるテラス	○			□E						268
	長 はねとくも	○			□E					別E	145
	共 JURAKURO			○e	□E						685
II a2	共 ニシケバレイ			○e	□E						534
	共 まえはしガレリア			○	□E					別E	1980
II b	共 ワカミヤハイツ			○	□E						348
	共 柳小路ハイツ			○	□E						109
II c1	共 麻布十番の集合住宅			○						□E	442
	長 鹿手袋の長屋			○						□E	751
	寄 OGU MAG+			◎				○E			148
II c2	寄 庭路地の家			○e				○E			149
	寄 シェアフラット馬場川			○				○E			443
	寄 アーブル自由が丘			○				○E			1218
II d1	寄 SHAREyaraicho							◎	□E		184
	寄 LT城西2							◎	□E		479
	寄 雪ノ下ファームハウス							◎	□E		191
	共 蛸池寮アサヒ							○	◇E		1063
	長 アーキペラゴ豊中							○	□E	別E	125
	寄 山之内元町長屋							○	□E	別E	92
II d2	寄 南六郷ハウス							○E	□		152
	寄 王子学生寮							○E	□		279
II e	寄 東工大岡山ハウス							○E	□e		141
	寄 北大路ハウス							◎E	○		253
	寄 ユウトヴィレッジ							◎E	○	別E	91
	寄 TONARINI			○				○E			937
	長 里山長屋				□E			○			378
	共 松ヶ崎荘	○e			□E						182
III a	長 御成ぶくろこうじ	○	○	○	□E						58
	長 緑町の集合住宅	○	○	○	□E						163
	長 虫村			○	□E			○			288
III b	寄 広瀬川コート			○	□E			○			129
	共 西薬西APARTMENT-2			○	□E					□	528
III c	共 江北小路			○	□E					□	1142
	寄 HafH Nagsaki			○				○E	○		791
III d	寄 鎌倉のリノベ			○				○E	○		138
	寄 海老名のシェアハウス							□E	○	○	580
	長 花水木			○				□E	○	○	318
III e	寄 新得農場男子寮							□E	○	□	256
	寄 はとやまハウス							□e	○E	□	100
	寄 南行徳FROMM							◎E	○	□	137
	寄 上島町のシェアハウス							◎e	◎E	□	183
	共 樺の音テラス		○		□E						601
	寄 OPENDOOR AP.2				□E			◎	○		117
	共 Thirdplace6			○				◎e	○	□E	395
	寄 ジャジャハウス				○E				◎E	□	195
IV a	寄 はちくりはうす			○	□E			○	○	□	377
	共 狹窪家族			○	□E			○	○	□	765
	共 食堂付きアパート			○	□E			○	○	□	261
	寄 (社福)ライフの学校			◎	□E			○	○	□	225
	寄 SHAREtenjincho			○	□E			◎	○	□	468
IV b	寄 水見の住宅			○	□E			○	○		96
	寄 コクリエ			○		□	○E	◎			408
IV c	共 角花	○		○				○	◇E		367
	共 西国分寺	○	○							別E	623
	寄 SHARED H. 八十八夜	○						○	○E		307
	寄 不動前ハウス					□E		○	○	□	147
V	長 ヨコハマアパートメン							□E			152
	共 青豆ハウス				□e					□E	490

フィルム・キョウト

劉 昊林

Film・Kyoto

LIU HAOLIN

1. 背景

建築は人々の生活の場として存在し、その内部には人々の生活に関わる重要な断片が蓄積されている。しかし、建築が解体・更新されることで、それに寄り添っていた感情や記憶の断片も失われてしまう。そして、老朽化などの理由により、建築の更新は避けることができず、それに伴って人々の感情の断片が失われることも避けられない。現在、世界各地で建築保存に関する多くの事例が存在するが、すべての建築を保存することは不可能である。特に目立たない建築の更新は日常的に起こっており、そこに蓄積された感情の断片をどのように保存すべきかが問題となる。

2. 提案

建築の更新が避けられないものであることを前提とし、本計画では建築そのものだけでなく、そこに内包されていた記憶の断片に着目した。都市の中に一つの建築を設け、それを記憶のアンカーとして機能させることで、人々が過去を想起し、同時に都市そのものも常に変化していることを意識するきっかけを与える。それにより、人々が身の回りの出来事に目を向け、それらを記録する行為へと誘導することを目的とする。

3. 敷地選定

本計画は地域市民を対象とする都市資料館であり、その用地選定において以下の三点を重視した。

- 適切な建築間隔と良好な視界の確保
敷地は向かいの建物との間に適度な距離を保ち、かつ交差点に位置することが望ましい。これにより、開放感のある視界と空間の広がり確保される。
- 市民の記憶と結びついた場所
多くの市民がかつて訪れたことがある、あるいは記憶に残る場所であることが重要であり、そのため京都市中心部を主な候補地とした。
- 周辺環境の更新性と地域性の両立
高密度で変化の多い商業地区を優先することで都

市の変遷を反映しやすくなる一方、過度な観光地化は避け、地域生活との結びつきが維持される場所を選定した。

以上の三点を踏まえ、本計画の敷地は、京都府京都市中京区、御池通と烏丸通の交差点南西側（図1）、現・ル現・明治安田生命ビル（図2）およびNHK京都ビ（図3）の位置とした。



図1 計画敷地



図2 明治安田生命ビル

図3 NHK京都ビル

4. 空間構成

建築は三つの部分から構成されている。空間の中心となる地上1~4階の美術館部分、地下に設けられた資料館部分、そして地下鉄出入口と両者をつなぐサンクンガーデンである。また、本計画では内部に二つの「循環」を設定している。一つ目は美術館内部の「動線の循環」、二つ目は「記憶の循環」である。

4.1 動線の循環

来館者は 1階 → 4階 → 3階 → 2階 → 3階 → 4階 → 1階 という順序で空間を体験する。

1階 1階は比較的暗いエントランスホールであり、中央には屋外に開かれた三角形の階段が設けられ（図4）、その中心には一本の夏椿が植えられている。これにより明確な視覚的焦点が形成される（図5）。来館者はチケッ

ト購入後、エレベーターで直接4階へ向かう。エレベーターは1階と4階のみに停止し、三角屋外階段はこの時点では伏線として存在する。



図4 三角屋外階段

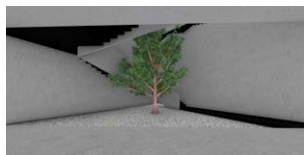


図5 1階視覚焦点

4階(初回) 4階も1階と同様にコンクリートを主体とした暗いホール空間であり、下降する屋外階段が視覚的焦点となり、1階との連動関係を形成する(図6)。また、4階には三面長方形の穴が空いた投影壁が設置されており、ピンホール現象の原理を用いて屋外の景色が投影される(図7)。欠けた部分によって「失われた部分は何のようなものなのか」という疑問が生じ、来館者はその疑問を抱えたまま室内階段を通じて3階へと向かう。



図6 4階視覚焦点

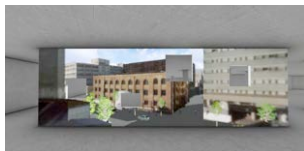


図7 欠損した投影壁

3階(初回) 3階は壁によって分節された白い迷路状の空間であり(図8)、その内部には複数の展示室が組み込まれている。ここでは主に都市の旧写真が展示される(図9)。迷路の外周部には三面の開口が設けられ、4階の三面の投影壁と対応している(図10、図11)。展示空間と開口部はそれぞれ、4階で提示された問いに対する「過去」と「現在」の回答として機能する。



図8 迷路空間



図9 展示スペース



図10 回答窓



図11 回答窓

2階 2階は3階と同様の空間構成を持つが、展示内容は1階のメディアルームで加工された、市民から寄贈された都市の記録へと変化する。展示内容には、文章、写真、映像などが含まれる。2階には1階へ直接降りる階段が設けられておらず、来館者は4階へ戻り、屋外階段を通らなければ退出できない構成となっている。

3階(再訪) 2階と3階の空間的な類似性により、来館者は3階に戻った際、再び迷路空間を探索しながら4階へ通じる階段を探す必要がある。この過程において、2階と3階の展示内容が重なり合い、「かつてここでこのような出来事があった」「当時の自分は何をしていたのか」といった個人的記憶の想起が促される。

4階(再訪) 一連の体験を経て再び四階の投影壁の前に立ったとき、投影壁に空いた穴はもはや疑問ではなく、時間の流れを示す装置として機能する。展示内の建築がすでに存在しないように、現在目の前にある建築や都市の風景も、やがて記憶へと変化していくことを示唆する。

1階(退出) 屋外階段を通して1階へ戻ると、階段の出口は取材カウンターに正対する。来館者はここで自身の写真や映像、口述記録などを提供することができ、それらはメディアルームや印刷室で加工された後、2階または3階で展示される。

4.2 記憶の循環

市民は展示体験を通じて共鳴を覚え、それをきっかけに自身の身の回りや都市について記録を始める。これらの記録は資料として寄贈され、再び展示内容となり、次に訪れる市民や次世代へ影響を与えることで、記憶の循環が形成される。

4.3 地下資料館とサンクンガーデン

美術館の地下には資料館が設けられており、京都市における都市変化に関する各種資料を収蔵し、その入口はサンクンガーデンの水盤側に隠される形で配置されている。サンクンガーデンは烏丸御池駅のギャラリーとも接続しており、美術館と連動した展示空間として機能する。

5. まとめ

本建築は、「動線の循環」と「記憶の循環」という二つの循環を通して、都市の変化を展示する場を創出するものである。建築体験を通じて、人々が建築の背後に埋もれた記憶や感情を再発見し、また、都市が常に変化し続けていることへ意識を向ける効果が得られるだろう。

(京都橘大学 工学部 建築デザイン学科・4回生)

6. 参考資料

- ・ ルイス・I・カーン [作], キンベル美術館 (世界建築設計図集;35), 同朋舎出版, 1984
- ・ SD編集部編, I. M. ペイ (現代の建築家), 鹿島出版会, 1983

縫いなおす風景

—野洲川と暮らしのあいだに—

飯田安澄

A Re-Stitched Landscape

-Between the Yasu River and Real Life-

IIDA Azumi

1. 計画の背景

滋賀県栗東市林地区は野洲川の近くに位置し、氾濫を受け止めながら長い時間をかけて集落が形成されてきた



図1 敷地周辺図

場所である。(図1)敷地には古い家屋や放置林が残り、(図2)森・田んぼ・川に囲まれた環境が現在も豊かな自然の層を形成している。一方で近年は田んぼの埋

め立てや住宅開発が進み、子育て世帯の増加に対し、集める場は十分ではない。こうした状況の中で、地域の風景や暮らしを未来へ継承するためには、建築と外部空間を通して人と自然、地域と人との関係を再構築する必要



図2 敷地調査

があると考えた。変化し続ける野洲川と、それを受け止め安定して残ってきた森の関係性を空間構成に内包し、人々が自然の中で安心して滞在できる拠点をつくるのが本計画の背景にある。

2. 計画の目的

本計画の目的は、人と自然、地域関係を「縫いなおす」ことである。野洲川の流動性と森の持続性という対照的な時間軸を空間に重ね合わせ、世代や目的の異なる人々が自然と交わる居場所を創出する。



図3 敷地全体を見る

学生や地域住民、高齢者がそれぞれの距離感で滞在できるよう、カフェやマルシェ、音楽スタジオ、フリースペ

ースを点在させ、活動の重なりが緩やかに生まれる構成とした。(図3)また、建築の配置と開口操作により、森・野洲川・近江富士へと視線が自然に流れる環境を整え、人と風景の関係性を身体的に意識させることを目指した。

3. コンセプト

計画のコンセプトは「縫いなおす風景」で、3つの縫いなおしを建築の軸としている。(図4)



図4

①風景を縫いなおす

野洲川、近江富士、森、田んぼという異なるスケールの風景を、建築とランドスケープで再接続する。遊歩道や広場、水盤を通して前景・中景・遠景を重ね、四季や光の変化を日常の時間に取り込み、人々の滞在を豊かにする。

②地域を縫いなおす

農や住まい、文化活動を重ね合わせることで地域の交流拠点を形成する。地元農産物を扱うカフェやマルシェを通して、人と地域資源の循環を可視化することで、地域の魅力を伝える。

③人の関係を縫いなおす

低く包まれる空間と開放的な空間を組み合わせ、多様な距離感の滞在を可能にすることで、世代を越えた自然な交わりを生む。

4. 空間構成・計画

敷地は野洲川に近いが、川は直接視認できない。そこで森の向こうに川が流れている気配を感じられるよう、開口の位置と軒の高さを設定した。(図5)

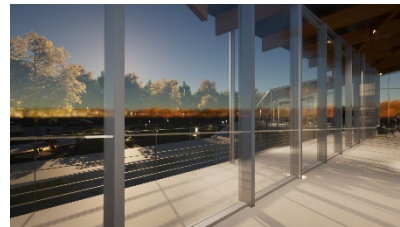


図5 室内から森を見る

室内から森を切り取る窓は、まるで一枚の絵画のように風景をフレーミングする。揺れる木々の奥に広がる空の

明るさと水盤の反射が遠景を強調し、そのさらに奥に流れる野洲川を想像させる構成とした。視線は奥へと段階的に抜け、静的でありながら奥行きのある体験を生む。建物は外部空間によって緩やかにつなぎ、屋根高さ(約6m~9m)と床レベルを段階的に変化させることで視線を制御する。低い軒下では森に包まれる感覚を、高い屋根の下では空や近江富士へと解放される感覚を生み出す。

① 遊歩道・ベンチ

散歩の途中に、季節の変化、風や光、木々の揺れを肌で感じながら過ごせる場所。短時間でもゆったりとした時間を体験できる。

② フリースペース

作業や読書、友人との会話、思い思いの過ごし方ができる空間。集中とリラックスが自然に両立するように配置や家具の位置を工夫した。木漏れ日や近江富士の視界を取り込み、開放感を持たせている。

③ 半屋外テラス

屋根の下で木漏れ日や風を感じながら過ごせる空間。周囲の森や田んぼとのつながりを感じられる空間として設計した。

④ カフェ・マルシェ

地域で採れた野菜や果物を使ったメニューを提供し、人と地域をつなぐ場として機能する。外の景色や広場と緩やかに連続させることで、訪れる人が自然に滞在できる。

⑤ 音楽ステージ・スタジオ

イベントの有無に関わらず、誰でも利用できる場所。自然環境に囲まれた中で、風や光、雨音を感じながら音楽を楽しめる。

5. 設計概要

① 平面計画

野洲川の流れを抽象化し、森から川へ自然に視線が流れる形態にした。(図6)



図6 航空から見たパース

② 断面計画



スラブのレベル差と軒高の差によって、圧縮と解放が連続する断面構成とした。高さを抑えたボリュームは周囲の田園風景に溶け込みつつ、遠景への抜けを確保している。

③ 外部空間

水盤は空や木々を映し込み、光や風の変化を可視化する装置として機能する。直接川を見せるのではなく、反射

や空の明度差によってその存在を想起させる計画とした。

④ 素材・構造

木を使った屋根や構造で温かみを出し、森や田んぼと調和するデザイン。活動ごとに空間の印象が変わるように構成し、人と風景、地域の関係を自然に重ねた。

こうした計画により、人・地域・風景の関係が自然に重なり合い、分断されてきた時間や記憶を再びつなぐ居場所となる。(図7)



図7 配置図兼一階平面図

6. 期待できること

世代を超えた交流の創出、自然との継続的な関わり、多様な居場所の形成、地域資源の循環が期待される。活動と風景が重なり合うことで、地域の日常にうるおいを与える。

7. まとめ

本計画は林地区の自然・歴史・暮らしに着目し、人と地域、風景との関係を建築とランドスケープを通して縫



いなおす提案である。

屋根や開口部を通して風景を切り取り、森・空・川・近江富士へと連なる

視線の構造を編み出すことで、建築は周囲の環境を再編集し、地域のランドスケープを再構築する存在となる。

地域の記憶や自然、野洲川との関係を次世代へと受け継ぐための、新しい風景の拠点となることを目指した。綺麗になった野洲川のほとりで、人々がさりげない良い休日を過ごせる場となることを願う。

京都美術工芸大学・白鳥洋子研究室・4年

河内平野を貫く長瀬川の再興計画

* 溝渕優香**

resurgence plan of Nagase river across Kawachi plain

Mizobuchi Yuka

1. 研究背景と目的

地域資源を活用した空間の創出は、都市の個性を取り戻し、住民の愛着形成、地域の歴史などを後世に伝えていくことにつながる。長瀬川は約 300 年前に行われた大和川の付け替えによって誕生した、東大阪市、八尾市、柏原市にまたがる約 14km の農業用水路である。工業地域や住宅街の間を流れ、川沿いの桜並木や歴史的な遺構も残る。2018 年にはその歴史的価値が再評価され、「世界かんがい施設遺産」に登録された一方で、農業用水路としての役割は大幅に減少している。そこで本研究では、長瀬川の形成背景と産業遺産としての価値を把握した上で、長瀬川を活用した公園と美術館を一体的に計画した、駅前に広がる多様な人々の水辺の再興計画を提案する。

2. 再生された水辺空間の事例調査

水辺の再興にあたり、歩行者空間として再生された水辺空間について「新建築データ」¹⁾と「ArchDaily」²⁾を用いて、国内 9 事例、海外 12 事例の合計 21 事例を調査した。水辺空間での行為として、眺める、触る、入る、足を入れる、乗って入る、釣りなどがみられ、これらの行為を誘発する建築的な仕掛けを把握するために、①断面構成、②水辺の境界要素、③ベンチ、テーブル、東家などのしつらえを調査した。断面構成では、地上レベルから水面のすぐ近くまで下りていける階段やスロープが有効に使用されている。水辺の境界要素では、高さを抑えることで水との距離を近くする、視線を遮らない、水の中を観察することができるような工夫がみられた。また、水辺には落下防止と景観的な効果を兼ねて、草木、花壇などが設けられていた。さらに、水との距離感を視覚的にも演出する大階段は、水面までの高低差を活かしながら水辺の居場所として人々の滞留を促している。

3. 設計提案

対象敷地は、JR 高井田中央駅の東側に位置し、JR おおさか東線、国道 308 号線、長瀬川遊歩公園に囲まれた末広がり形状をしている。この地域は、長瀬川の水を取水している大和川から約 13km 地点であり、「ものづくりのまち」として知られる東大阪市の中でも特に工場が集

積している。国道 308 号線は交通量が多く、その上空には阪神高速道路が通り、道路沿いにはマンションやビルなど画一的な建物が建ち並ぶ。長瀬川遊歩公園は、地域住民の憩いの場として整備されたが、あまり人の姿が見られず閑散としている。また、敷地の北から東側には住宅や中小工場が建ち並び、南西側は高速道路と鉄道線路に囲まれているなど、ヒューマンスケールと土木的スケールの間に位置していることも読み取れる。

本計画は、都市の中に埋もれている長瀬川を顕在化させることを目的とし、長瀬川の水を積極的に活用した立体公園の設計を通して、現代の都市的な役割を併せもつ水辺の居場所を創出することを目指す。度重なる洪水により土砂が堆積を繰り返したこの敷地の歴史を踏まえ、全体を複数の地層が重なるランドスケープにとらえ、重なり合う層をスロープで繋げる。また、既存の都市環境を踏まえたスケールとし、北から高架に囲まれた南西にかけてボリュームが大きくなる構成とすることで、2 つの異なるスケールを繋ぐ存在として機能させる。川のように緩やかな曲線を描くスロープは人を運び、時には滞留を促す。その隙間からは光や雨が注ぎ、対岸にいるような関係で人々の行動が見え隠れし、興味を惹きつける。



図 1 都市的ダイアグラム

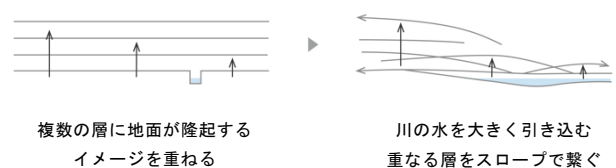


図 2 建築的ダイアグラム

加えて、敷地内に流れる長瀬川は下流域に位置するため、水面には集まったゴミが漂着していること、周辺の工場や高速道路からの排気ガスなど地域が抱える負のイメージを、「ものづくりのまち」として環境問題に問いかける現代アートを展示するアートパークとする。屋外アート、展示室、カフェ、やおや、ライブラリー、アップサイクル製品のショップ・工房などを点在させ、スロープを上りながらアートや施設を楽しみ、いろいろな高さから長瀬川の水を眺められるようになる。敷地中央には長瀬川の水を大きく引き込み、水の広場を設けることで、入水が禁止されている長瀬川の水に触れ、入って遊べる水辺空間をつくる。JR高井田中央駅、地下鉄高井田駅も緩やかに隆起したアートスケープのなかにつなぎ、駅間の移動の中にも水辺を感じ、日常にアートが浸透するような都市の風景を創出する。

【参考文献】

- 1) 新建築データ, <https://data.shinkenchiku.online/>, 最終閲覧日 2026年1月19日
- 2) ArchDaily, <https://www.archdaily.com>, 最終閲覧日 2026年1月19日

□ (*京都女子大学 家政学部 生活造形学科・4年*)

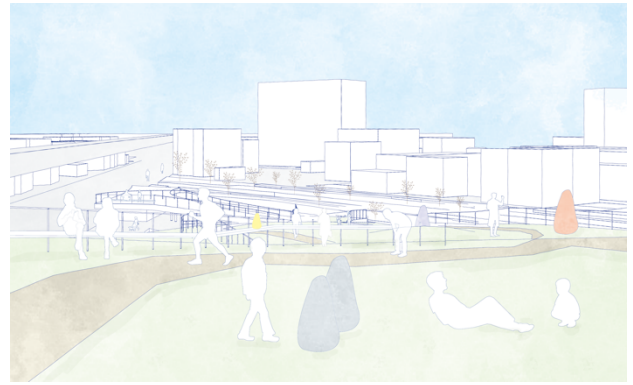


図3 大屋根から長瀬川遊歩公園を見る

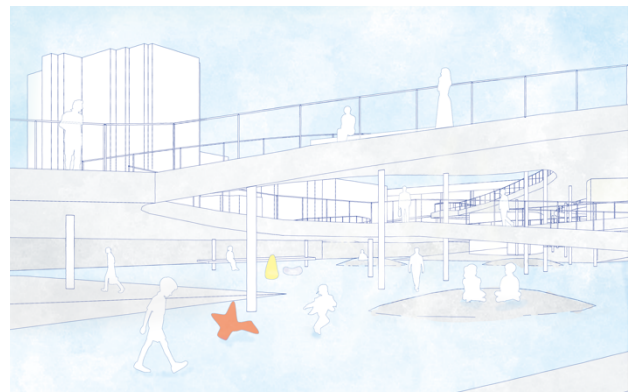


図4 水の広場を見る

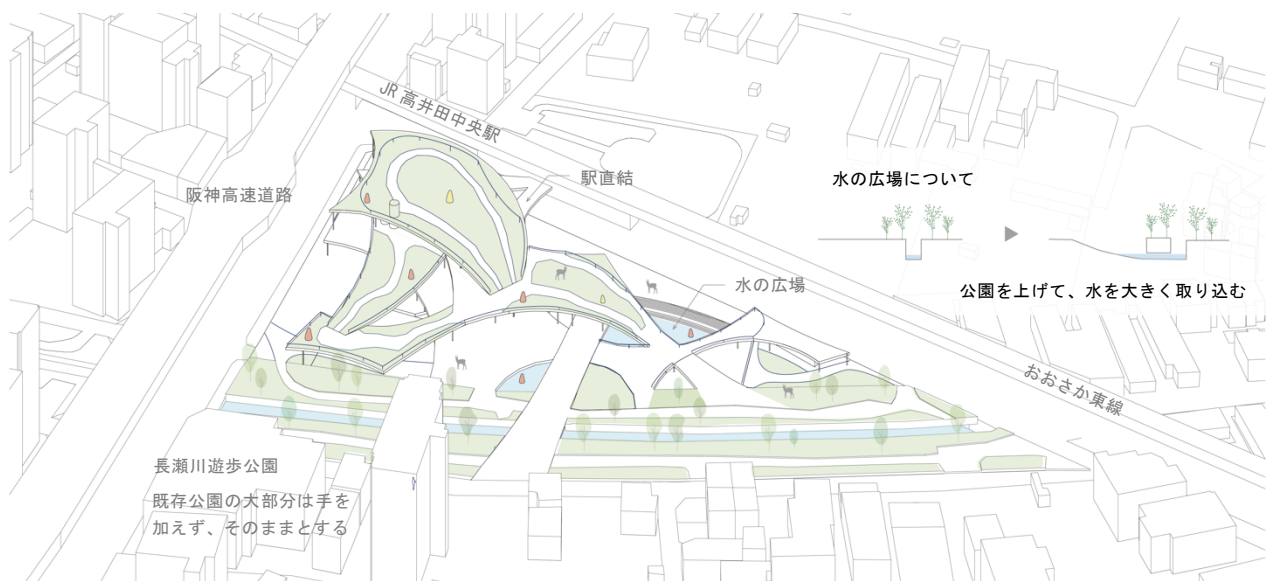


図5 俯瞰パース

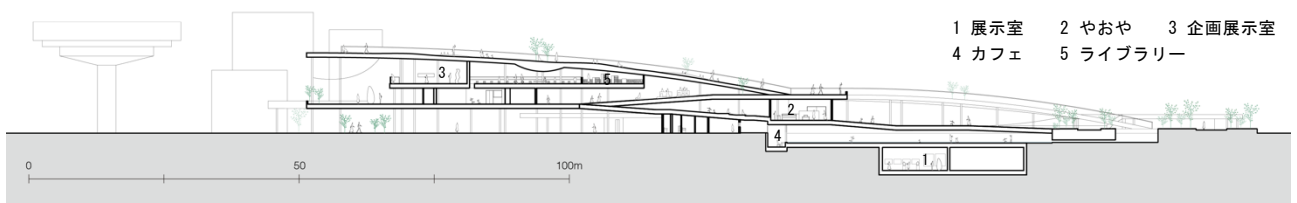


図6 断面図

関係人口の創出に向けた地域拠点の提案

有馬叶

A Proposal for a Regional Hub to Foster the Creation of a Related Population

Arima Kana

1. 研究背景・目的

日本各地で進行する少子高齢化と過疎化は、農業の担い手不足や後継者問題、耕作放棄地の増加、さらには地域景観の悪化といった問題を引き起こしている。特に地方の小さな地域においては、これらの問題を住民のみで解決することは困難であり、外部との新たな関係性の構築が求められている。こうした状況の中で近年注目されているのが「関係人口」という概念である。これは、一時的な観光客や定住者とは異なり、継続的かつ多様なかたちで地域と関わる人々を指す。関係人口の創出は、地域に新たな視点や活動をもたらす、持続的な再生の契機となり得る。本研究では、奈良市田原地区を対象とし、地域の風景と調和した、関係人口の受け皿となる地域拠点を提案する。

2. 山間部における景観に配慮した建築デザイン

田原地区は中山間地域に位置していることから、拠点設計において山並みとの調和が求められる。そこで、『新建築データ』で「山間」と「中山間」で検索した事例の中から、建物の背景に山を含む事例を、年代の新しいものから27件選出して調査を行い、特徴として以下の3点を把握した。①構造は、木造が多く、これは山間部における林業資源の活用だけでなく、素材の経年変化を通じて風景との同化を図る意図が読み取れる。②外観は、周囲の稜線に呼応するように切妻屋根が多く採用されている。特に積雪地では急峻な屋根勾配が選択されるなど、気候条件が反映された地域性も表れている。③建物の高さは、周囲の雑木林や山並みを超えないよう抑えられている。

3. 設計提案

本計画では、奈良市田原地区を対象に、地域外に居住しながらも田原との継続的な関わりを持つ関係人口（地域文化や農業に関心を持つ都市住民、ものづくりに携わるクリエイター、地域イベントのリピーター、移住検討者など）と地域との持続的な関係構築を目指すための拠点を設計する。

「地域拠点」となる施設は、田原地域の中心部に計画

する。奈良市田原小中学校の西側に位置し、田原交差点の北西側の県道沿いである。計画敷地の西側には水田が広がり、道路を挟んで白山神社がある。配置計画は、西に望む鎮守の森と、南東に望む山に向かって求心的なS字となるよう拠点施設を配置し、訪問者が田原の農業・生活文化・自然環境に触れられる動線を創り出している。駐車場を挟んで北側には、農業体験を行えるよう、農作業場と銭湯が一体となった宿泊施設を配置した。また、既存の道路から伸びて川や田を通る散歩道は、敷地全体を回遊できる。芝生広場は、交差点から人が流れ込むようにするため、施設へとゆるやかに下がる傾斜をつけ、全体の玄関口であるとともに、小中学校に通う子どもたちの遊び場になる。誰でも気軽に入りやすい空間を設けることで、初めて訪れる人でも地域の日常に自然に入り込める環境を整えている。(図1) 外観は周辺の山並みとの調和に配慮して、山の稜線が続くようにのびやかな木の架構を現した屋根とし、遠景の山並みの景観を損なわないように全体の高さを抑えた。(図2)

また、「地域拠点」から車で3分の場所に、長期滞在者向けの宿泊施設を2つ計画する。「見上げる家」(図3,4)は、南北を茶畑に挟まれている閑静な敷地、「見下げる家」(図5,6)は、東西を田と茶畑に挟まれている緩やかな傾斜地に計画する。どちらの施設も茶畑の傾斜に沿って斜めの屋根をかけ、茶畑や水田の風景を見上げたり、見下げたりして展望できるように設計する。

地域拠点では地域住民との交流やイベント参加を促し、宿泊施設では農作業や風景に浸る滞在体験を通じて、田原地区を何度も訪れ継続的な関わりを生む関係人口創出の拠点となる。

【参考文献】

1)新建築データ：<https://data.shinkenchiku.online/>、最終閲覧日 2026年1月20日

(京都女子大学 家政学部 生活造形学科・4年)



図1. 「地域拠点」鳥瞰パース



図2. 「地域拠点」南立面図

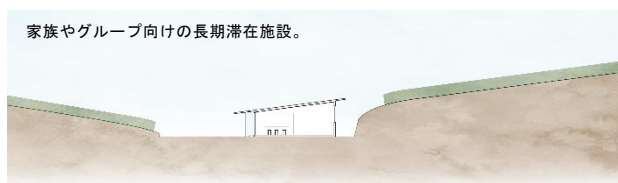


図3. 「見上げる家」断面図

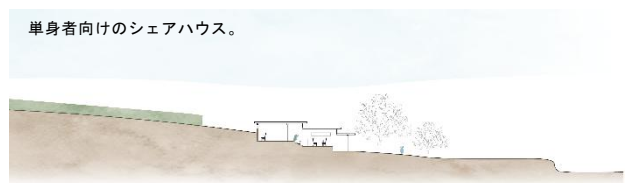


図5. 「見下げる家」断面図

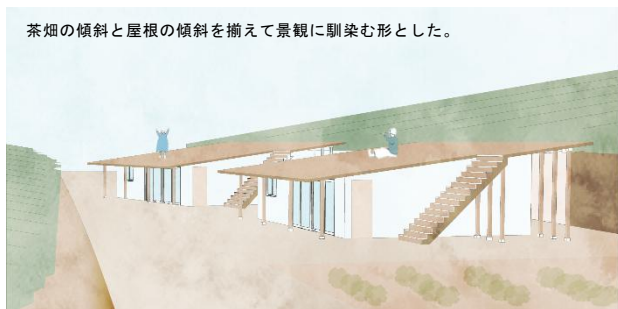


図4. 「見上げる家」外観パース

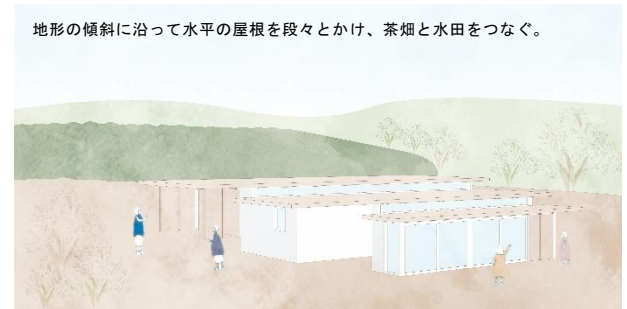


図6. 「見下げる家」外観パース

海と人の next step

-福井県大飯郡高浜町における地域活性化のための宿泊施設-

矢部研究室

K22009

井本弥玲

1. 研究背景と目的

福井県高浜町は若狭湾国立公園内に位置しており、美しい海岸線や自然が魅力的な地域¹⁾である。中でも若狭和田海水浴場は、世界の綺麗な海に贈られる称号“ブルーフラッグ”を2016年にアジアで初めて獲得しており、夏には海水浴を目的とした人が多く訪れる。また、京都に海産物を運ぶ“鯖街道”の出発地点として、奈良の朝廷や皇室に海産物や塩を納める御食国であったという食文化の歴史がある。そのため、昔から浜辺では漁業や製塩業が盛んであった。

しかし、町の人口は減少傾向にあり、漁業の賑わいが失われてきている。また、海と山に囲まれた自然豊かな場所に位置し、かつては臨海学校の子ども達や海水浴の宿泊客で賑わっていた国民宿舎も老朽化と経営難で閉業し、その好立地を生かすことができていない。

そこで本研究では、浜辺の賑わいを取り戻して高浜町の魅力を知ってもらい、観光客や移住者を増やすことができる宿泊施設の設計提案を行う。

2. 研究方法

まず、「新建築」²⁾より過去30年分の宿泊施設、歴史や文化の伝承施設、海辺を生かした施設に関する事例の中から20件抽出し、建築情報カードを作成した。次に、既往論文の調査を行い、漁業と観光に関連する論文³⁾の中から5件を抽出し、調査・考察を行い、まとめた。

さらに周辺施設を調査して外来者と地域住民が施設で行うプログラムを検討し、これらをもとに設計条件を設定して本設計を行った。

3. 設計

3.1 計画概要

計画敷地を図1に示す。

所在地：福井県大飯郡高浜町事代6-1-1

アクセス：JR若狭高浜駅から徒歩17分

周辺環境：3方向が海に囲まれている。若狭湾国立公園である城山公園が隣に位置する。

3.2 設計概要

敷地面積：約9,400 m²

建築面積：2,071 m²

延床面積：5,908 m²

建築構造：RC造、一部木造

規模：地上3階



図1 計画敷地

3.3 コンセプト

高浜町は鯖街道の出発地点として漁業が盛んな町であり、従来は“地域住民”が“外来者”に海産物を運んでいた。そこで私は、新たに“地域の魅力を知った外来者”が“次の外来者”に高浜の魅力運び受け継ぐ方法と、日常生活の中で地域住民と外来者が交流し海が人を繋げ、人が海を受け継いでいく方法を考える。

計画敷地である城山地区は、海・山に囲まれた自然あふれる土地である。それを活かして外来者から地域住民まで利用・交流ができる宿泊滞在型ワーケーション施設を提案する。

交流方法を3つ提案する。1つ目はワーケーションで、同職・異職種問わず同じ空間にいる人との会話が自分の知識や経験になると考え、ワークスペースを設けた。2つ目は海産物で、町民が釣りや調理を教えることで経験や思い出になると考え、シェアキッチンを設けた。3つ目は歴史で、土産話・物で高浜町の魅力を外来者が発信可能であると考え、特産物を販売するスペースを設けた。

外構計画では、1階から屋上まで通る大階段を施設を中心として人々の憩いの場となるように設けた。レストランで料理をテイクアウトして食べたり、入浴後にまったりとくつろいだり、おしゃべりをしたりと様々なシチュエーションを想定した。

【参考文献】

1) 高浜町 HP (最終閲覧日 2025 年 12 月)

https://www.town.takahama.fukui.jp/page/sougouseisaku/kouen/p006250_d/fil/02_m_genkyou.pdf

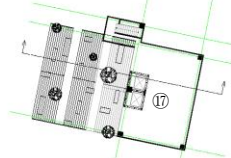
2) 新建築, 株式会社新建築社, 1991~2023 年

3) 青木 佳子: 漁業と観光を支える地域組織, 日本建築学会大会農村計画委員会研究協議会資料「世代の継承に向けて」, pp. 6-7, 2022 年



配置図兼1階平面図

- ①エントランスホール ②事務室 ③リネン室 ④機械室 ⑤会議室
 ⑥カフェレストラン ⑦シェアキッチン ⑧ゆったり広場 ⑨大階段
 ⑩オープンデッキ ⑪駐車場 ⑫ワークスペース ⑬1人向け客室
 ⑭2～3人向け客室 ⑮3～5人向け客室 ⑯大浴場 ⑰展望テラス



屋上平面図



3階平面図



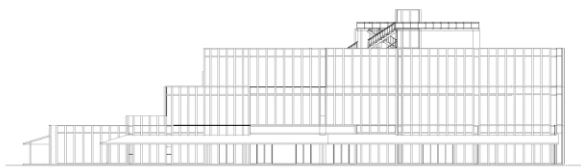
2階平面図



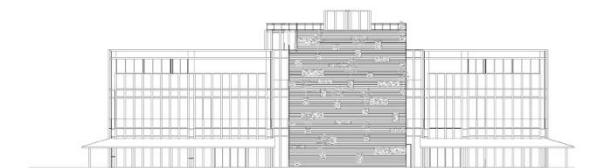
北立面図



東立面図



南立面図



西立面図

Flow

—車いす利用者と地域が日常を共有する集合住宅の提案—

矢部研究室

K22029

堺目愛和

1. 研究背景と目的

地方に暮らす重度障害者や車いす利用者は、交通の不便や環境の問題、周囲の理解の不十分さなど、複合的な要因によって社会とのつながりが限定され、孤立感や経済的困難を抱えやすい現状がある。またその家族には長期的なサポート、教育や雇用の選択の問題がある。

そこで本研究では、障害者や車いす利用者とその家族が地域において安心して社会と関わり一人でも自らの力を発揮しながら暮らすことができる仕組みを集合住宅の設計を通して提案する。また交流を通じて地域住民が障害者への理解が促進することを目的とする。

2. 研究方法

まず、車いす利用者の生活を知るため、既往研究や関連文献調査を行った。次に、建築雑誌の「新建築」より掲載された福祉施設や高齢者向け住宅の事例を収集しその中から特に参考となる事例を20件抽出し、建築カード作成、各事例の主要諸室の面積の分析を行った。これらの情報をもとに制作を行った。

3. 設計概要

計画敷地図を図1に示す。

所在地：和歌山県西牟婁郡田辺市上富田町南紀の台
敷地面積：約22,500㎡

敷地周辺：計画地である新庄総合公園の北側には医療センターや、老人ホーム、南側の山を下ったあたりは二次産業が盛んであり、東側は住宅街があり、公園内にはたくさんのアスレチックや花畑、屋外音楽ホールや散歩コース、美術館などが設けられている。



図1 計画敷地図

4. 建築概要

建築面積：4385.5㎡

延床面積：2106.5㎡

構造：木造（空中ジップライン：鉄骨）

規模：地上1階

5. 設計コンセプト

本計画は、車いす利用者や重度障害者の生活を支援や配慮の対象として特別視するのではなく、身体条件の違いを空間体験の違いとして捉え、身体障害者がもたらす知覚の可能性を空間へ構成することを提案する。走れない、立てない、長く歩けないといった身体的制約は、できる・できないという能力差として扱われがちであるが、本計画ではそれらを風の感じ方、移動の速度や高さ、視線の位置といった体験の差として空間に組み込み、誰もが同じ環境の中で異なる楽しみ方を持てる状況を目指している。

住戸内外に点在する移動、休息、制作、栽培、調理といった生活行為は、明確な用途や役割として分断するのではなく、日常の延長としてにじみ出るように配置されている。その結果、住民同士だけでなく、地域の人々や子どもたちも特別な意識を持たずに敷地へ入り込み、同じ風景や時間を共有することになる。

空中ジップライン：車いすに依存しない移動の手段として障害のある人が敷地内を主体的に移動できる。また外部の子供たちも利用することで障害のある人との空間を共有する経験が自然に生まれる。

縁側：歩行、車いす、空中ジップラインという異なる移動の視線をそろえる中間領域として、敷地全体に配置している。併せて、体調変化時すぐに身体を寝かせられる場として機能する。

風の通り道：走り抜けたときに風を強く感じられる環境とし、移動そのものが身体的な楽しさにつながる場所として計画した。

趣味スペース：外へ開いた構成とすることで、そこで生まれる活動を周囲と自然に共有できる環境としている。

住戸計画：空中ジップラインでの移動のため動線を極力単純化するため一直線の廊下に沿って連続的に居室を配置し、また中央部から各部屋へ直接移動できる構成とすることで、無駄な回遊を抑え、効率的な移動を実現している

外構：平面計画では曲線によって日常の移動や関わりが流れるように重なっていく様子を表し、高さは直線によって上下差が序列をつくらない構成としている。



- | | | |
|---------|-------------|--------|
| ① 図書室 | ②③展示・共有スペース | ④風の通り道 |
| ⑤栽培スペース | ⑥寝ころびスペース | ⑦カフェ |
| ⑧リハビリ室 | ⑨趣味室 | ⑩駐車場 |
| ⑪トイレ | ⑫事務室 | |



住宅立面図1

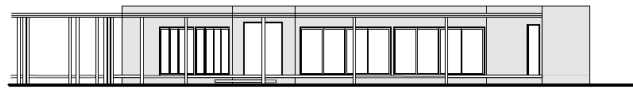
住宅立面図2



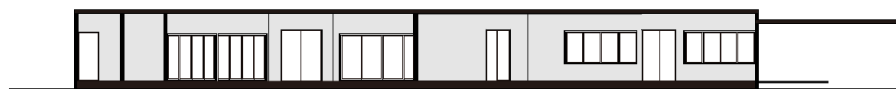
図書室 立面図



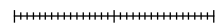
図書室 断面図



カフェ・リハビリスペース 立面図



カフェ・リハビリスペース 断面図



キモチ空間/COMBINE

間取りが変化する空間の提案

* 岩村えみり

Kimochi Space/COMBINE

A Proposal for Emotion-Responsive Spatial Layouts

Iwamura Emiri

1. 研究背景と目的

人が住む空間は、あらかじめ限られた領域の中でどう過ごすかが、基本的な形に反映されている。しかしその過ごし方に一定のルーティーンがあっても、日々の暮らしの中で、毎日服を着替えるように、毎日違う食べ物を食べるように、住む場所も少しずつ形を変えることができれば、より住人の気持ちや生活スタイルに合った生活を送ることができるのではないだろうか。そこで、本研究では人の気持ちに対応して変換する住む空間の変形家具とそれが実現できる住空間の可能性への提案を行う。

2. 研究概要

本提案で空間に取り入れる間取りを変えるための装置を空間装置と定義する。

この研究で提案を行う住む空間の空間装置は主に、動かすことで可動壁・小上がり床・収納・椅子・テーブルになり、さらに空間側にレールを設置することでそれらが着脱、移動、変形し、空間が変化することを検討していく。既往研究では参考文献の調査、形が変化する家具や、構造体を組み合わせることによって形を形成するシステムの事例調査、住む空間に対する様々な思想、コンセプトによる建築の事例調査を行った。そこから具体的なデザイン案スケッチ、空間の大きさの検討、高架下や海岸、住宅地など住宅の建つ環境の検討とその複数のパターンの想定、簡易的な設計図や装置を配置した際の具体的な想定を行った。浴室・更衣室・トイレ・キッチン周りの壁は装置を使用せず、固定した壁にする。

3. 空間装置

3.1 概要

住人の気持ちに合わせて気軽に間取りを変化させるために、パズルのように移動することのできる壁をイメージし、この空間装置を検討した。そこから日々の暮らしのシーンを抽出し、可動壁で空間を創る形や大きさ検討した。また、基本の固定されるレールの間隔やその展開について検討し、空間全体の形状などについてもパター

ン化を考えた。この空間装置を床に並べ、上下固定されたレールの上をパーティションとして動かすことで空間を変化させる。また、空間装置は左右移動のほか、片開き扉のように一定の角度に動かすこともできる。

また収納については、格子の内部に切れ込みを入れたウレタン素材を用いモノを挟み込んで収納する。梱包材のしくみから着想を得て検討した。空間装置に挟み込めない大きさのモノは間取り内に最低限の棚などの収納場所を配置する。

空間装置を床に配置した上下のレールをパーティションのように可動壁として動かすことで間取りが変化する。また空間装置の片側はレールから外すことができ、片開き扉のように動かすことができる。空間装置を配置する床やレールに決まった形は無く、建物を建設する敷地一面に床を張り、そこに空間装置を並べる。そうすることで間取りを変化させる柔軟性が高まる。レール同士の距離間隔については、空間装置を小上がり床に変形させたときの大きさに少し余裕を持った距離とした。1本のレールに配置する空間装置は床面積によって変わるが、およそ5枚とする。(図1) 間取りを変化させる、とあるが空間を完全に仕切るわけではない。これは、空間装置を気軽に動かせるようにし、住人に自由な発想をさせるためである。

3.2 変形方法

- ・空間装置は床から40cmのところで折り曲げることができ、足場を立てることで小上がりの床に変形する。主な使用用途としては、ベッドや部屋の区切りとする。

- ・空間装置に人が乗る際の強度については、内蔵されているパネルと足場を立て、上からパネルを合わせることで床または低めのテーブルとしての強度を実現する。

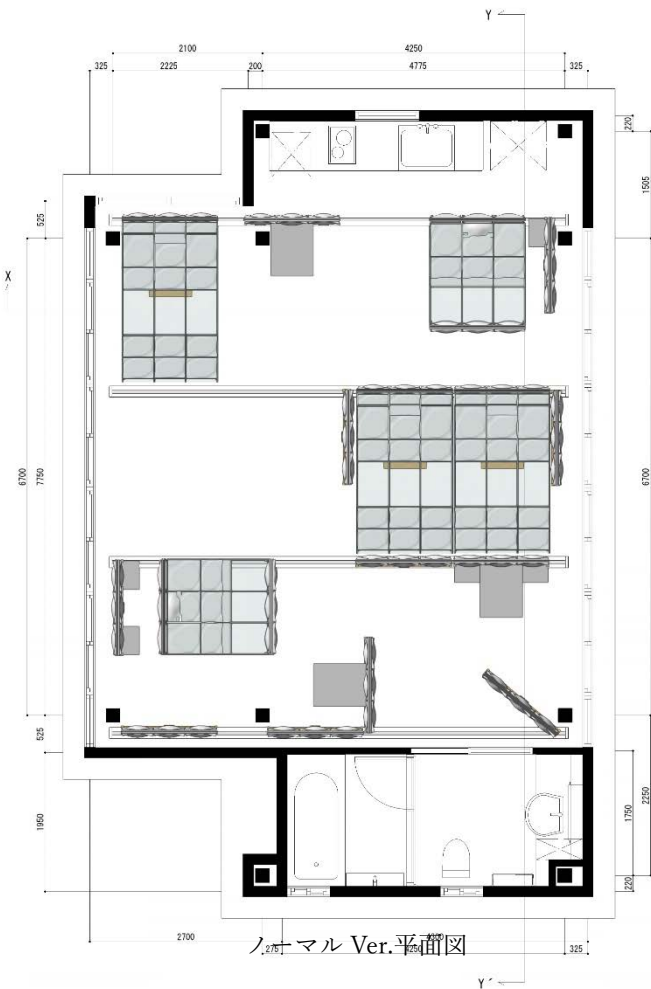
- ・空間装置を床から70cmのところで、小上がり床と同じ方法で折り曲げることで大テーブルとして使用することができる。ダイニングテーブルや作業テーブルとして使用する。

- ・空間装置の下部にあるパネルを開くことでチェア、小テーブルに変形する。

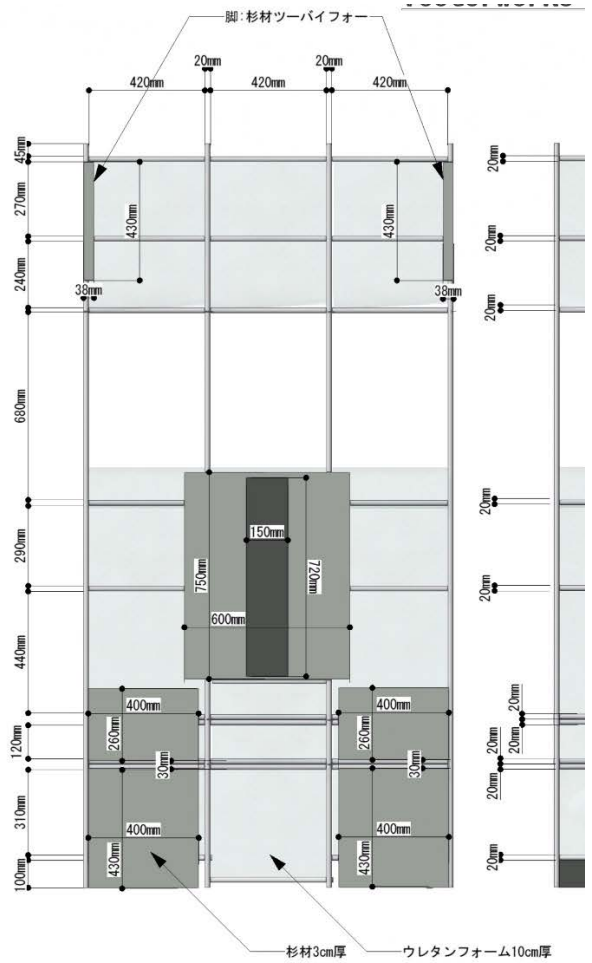
4. 制作概要

装置を使用した一例としてノーマルバージョン、クローズバージョン、オープンバージョンの3つを想定した。

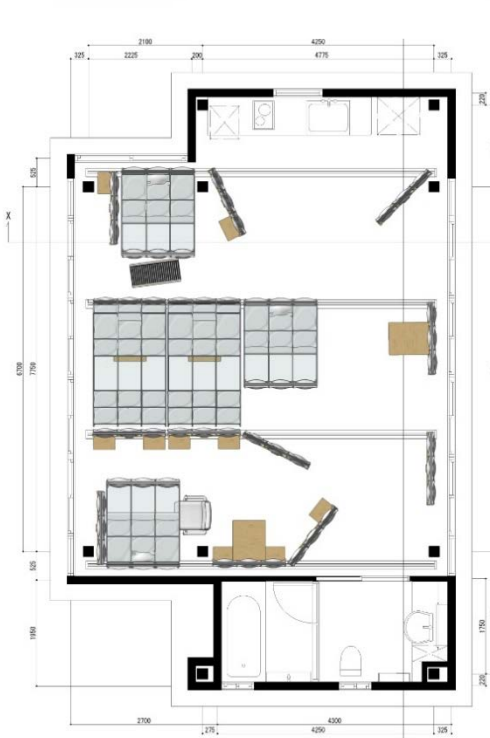
(*帝塚山大学・4年)



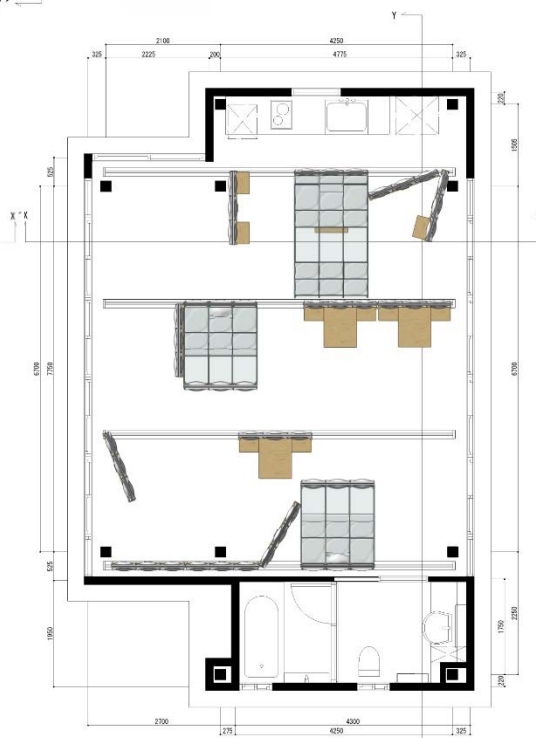
ノーマル Ver. 平面図



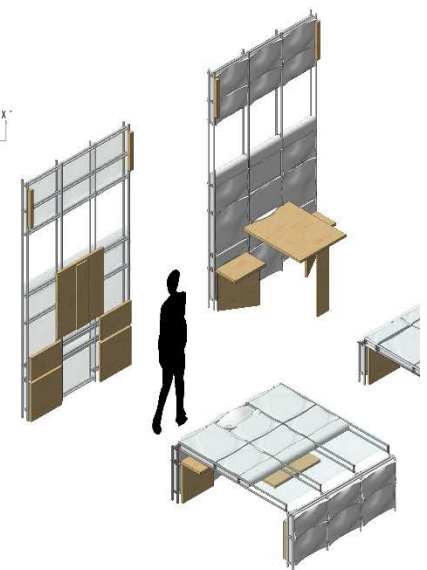
空間装置図面



オープン Ver. 平面図



クローズ Ver. 平面図



空間装置変形例